

青年期の自己形成における友人関係の意義

The significance of friendship to self development during adolescence.

中間 玲子*
NAKAMA Reiko

青年期の自己形成に関する関係性の問題にアプローチすることを目的に、青年期の友人関係に焦点をあて、それが自己形成過程といかなる関係にあるのかを検討した。

第1節においては青年期の友人関係の特徴について、友人関係の発達の変化の観点から整理した。友人関係が行動的つながりを基調としたものから内面的つながりを基調としたものへと変化することを示し、さらにそれがいかなる仲間関係として展開されるのかについて、ギャング・グループ、チャム・グループ、ピア・グループという3つの関係から整理した。

第2節においては、青年期における友人関係が自己形成においていかなる意義をもつのかについて検討した。友人関係について、異質な他者との出会いによる自己意識の明確化、自己形成の指針、および、精神的安定の基盤としての側面を指摘し、それぞれの特徴について述べた。

第3節においては、第2節における議論をさらに深めるため、青年期初期に構築される親密な関係に焦点を当て、そこに指摘される発達の意義についてさらに深く検討すると共に、その関係がもたらすリスクについて検討した。本稿では親密な関係の発達の意義はピア・グループという異質性を認め合う関係性への移行を前提として論じられ、親密な関係の特質としては、排他性を伴いがちな関係である点と人間関係の信頼に基づく関係であるという点の2点が抽出された。

最後に、今後の具体的課題として、特に第3節で提起された親密な関係に伴う両側の側面についてのさらなる検討、親密な関係についての質的変容をめぐる議論をふまえた検討の必要性が提示された。

キーワード：青年期、自己、自己形成、友人関係、親密性

Key words : adolescence, self, self development, friendship, mutuality

はじめに

青年期は、子どもから大人への移行期とよばれる時期であり、この時期には、さまざまな自己の変化が経験される。たとえば身体変化である。この具体的で観察可能な自己の変化は、青年が、もはや子どものままではい続けられないことを現実的に示すこととなる。人が身を置く生活空間も、年齢にしたがい、小学校から中学校、中学校から高校、高校から大学へと具体的に変化する。それに伴いその者の社会的地位は変化し、本人自身もそれぞれの場所で「中学生としての私」「高校生としての私」「大学生としての私」を生きることとなる。これらの変化はわかりやすい形で、子どもから大人への移行を促すこととなる。そのような移行に伴う変化は、青年の関係性に大きく影響を及ぼす。身体や社会的地位は、「私」がいかなる存在であるかについて社会に発信するものである。それが変わることは他者との関係性を変える。

一方で、私たちの自己は他者との関わりの中で育まれる。私たちは他者との違いをとらえることで自己の輪郭を明確にとらえ、また、他者との相互作用の中に様々な自己についての情報を知覚している。その関係性が変化

することは、私たちの自己が変化するということにはほかならない。自己と関係性はそのような相互構成的な関係にあり、自己形成過程を考える上で、関係性がどのように変化するかを理解すること、さらにそれがどのように自己形成過程に影響を及ぼすのかを理解することは重要な課題である。

青年が友人関係に没頭する姿は古今東西問わず観察されており、また、青年期の友人関係が青年の自己形成においてもつ重要性を指摘する見解も多い。青年自身にとっても友人関係は重要なものとしてとらえられ、青年期には、友人関係を維持しようとするより多くの時間や労力が割かれるようになることが知られている。たとえば Rubin, Bukowski, & Parker (2006) によると、高校生は起きている29%の時間を学校の時間以外での友達とのやりとりに費やしており、他の大人とのやりとりに費やす時間は13%に過ぎないことを報告している。青年期になると、児童期と比べて、はるかに多くの時間を両親よりも友達と共有するようになるのである。

そこで本稿は、青年期の自己形成に関する関係性の問題にアプローチすることを目的に、青年期の友人関係に

焦点をあて、それが自己形成過程といかなる関係にあるのかを検討することとする。

本稿で論じる自己形成には、認知能力、社会的スキル、自己制御機能などを含む、行動主体としての自己の変化に関するところと、それを自己としてとらえる自己意識の発達に関するところが含まれる。行動主体としての自己の変化は、私たちが知覚しえない、行動や態度の変化となって現れるところも含む。すなわち、経験の中でさまざまな能力を獲得していったり、経験を蓄積していったりする、人格形成の過程として説明しようところである。自己意識とは、その主体たる存在を他の誰でもない“自己”としてとらえる意識である。それは、行動主体を客体として対象化するという後続の事象でありながらも、その意識内容が主体の行動に影響を与えるという側面をもつ。すなわち、行動主体が変わると、そこで対象化される自己も変わるが、行動主体そのものが自己意識によって規定されているというところももつという相互循環的な関係にある。自己は、主体を客体化したものでありながら、主体の行動を大きく規定するという性質が指摘されるのである（中間、2012）。よって、人格形成の過程とされる行動主体としての自己の変化は、自己意識と重要な相互作用の関係にある。

これら、行動主体としての自己が形成されていく過程や、それに対する理解や感情や態度といった自己意識に関する側面が経験の中で形成されていく側面を、本稿では自己形成としてとらえる。その過程に友人関係がいかに寄与するのかを整理し、今後の具体的検討へとつなげていきたいと考える。

なお、青年期の友人関係をめぐっては、時代の変化、コミュニケーション・ツールの変化に伴い、その議論の内容も多様化しているが、本稿の主たる目的は、青年期の友人関係を自己形成の文脈において整理することにある。そのため、ここでは主に典型的な友人関係の発達の様相に焦点をあてて上記課題に取り組むこととする。

1. 青年期の友人関係の特徴

関わりの持続する同年齢の他者は友だち、友人と呼ばれる（本稿では、以下、“友人”と表記する）。青年期の友人関係では、内面的な深いつながりによって結ばれた“親友”との関係が築かれることが特徴とされる。本節では、ここに至るまでの友人との具体的な関わり方における年齢に伴う発達の变化の概観を通して、青年期の友人関係の特徴について整理する。

（1）友人関係の中心的要素における発達の变化

何をもって友人とするのか。友人関係を構成する中心的要素は、発達に伴って変化することが知られている。

Youniss（1980）は、友人関係を構築する際に用いら

れる方法が年齢と共に変化すると報告している。6歳の場合には、友達との相互作用では遊んだりおもちゃを共有したりすることが観察される。10歳になると、お互いを誘うといった行動がみられるようになる。13歳では、相手が困ったときに助けるという行為が展開されており、特に、信頼するという行為によって友情が示されていた。このくらいの年齢になると、友人との感情的な状態のやりとりが友情を深めることが分かってくるようである。青年期の友人関係は、相互に親密で、互いの内面を打ち明け合うものとなる（Youniss & Smollar, 1985）。

Goodnow & Burns（1985）も、ごく幼い子どもにおいては、一緒に遊ぶ、食べ物をあげたら相手も自分にくれるなど、もっぱら共に遊ぶことや具体的な互惠性こそが友人であることとして語られるのに対し、小学校の間に、多くの時間を共に過ごす、関心を共有する、そして自己開示し合うといった友人関係を望むようになること、友人を語る際にも、理解、忠誠、信頼といった言葉が用いられるようになると述べる。

カナダとスコットランドの児童を対象とした Bigelow（1977）においては、いずれの対象においても友人との関わり方についての共通した発達の变化が示されている。Bigelow は6歳から14歳の子どもを対象とした友人についての作文の内容を分類し、個人にとって「友人」が何を意味するのかについて、3つの発達段階を想定できるとした。第一段階は共通の遊びと物理的的近接性の段階である。この段階での友人関係は、行動レベルでのつながりを中心としたごく表象的な関係とされる。第二段階は規範的段階であり、道徳や規則に対する態度など、社会的規範に対する態度が望ましい者が友人として好まれることとなる。そして第三段階では、共感、理解、自己開示を介したつながりが形成されることとなり、ここでは、コミュニケーションの親密さによって友人関係が築かれる。またそこでは、仲の良い友達選択の理由について、3年生までの子どもでは、物理的的近接性と共有活動が多いこと、5年生になると、互いに対する忠誠や助け合いといった内面的な理由が増えることが報告されている。また、高学年になると、友人と親友とを分けるようになることも指摘されている。

また、Gurucharri & Selman（1982）は、社会的ジレンマ場面に対する回答内容について、未分化な段階、互惠の態度に基づく段階、共同の段階、そして相互依存的な段階へという発達段階を想定し、6歳から12歳の子どもに対する横断的調査および3年間の追跡調査によってそれを確かめている。ここから、友人関係は具体的行動に基づく友人関係、互惠の態度に基づく友人関係、相互恩恵、そして深い心理的関心を共有する友人関係へと発達すると述べている。それは、互いを個として認めながらつながるという関係への変化ととらえることもできる。

井上（1966）は、以上のような幼児期，児童期，青年期において観察される友人関係の特徴を表1のようにまとめている。ここからわかるように，友人関係は，遊びや行動を中心とした表層的つながりを中心としたものから，相互の人格の尊敬と内面的な深い共鳴とに基づいたものへと変化することが知られている。そしてそれぞれのレベルに応じて，相互の人格に影響し合うところも，行動傾向といった表層的なところから，価値観や信条などより中核的側面へと変化すると考えられる。青年期には，価値を共有することが友人選択における重要な理由を占めることとなり，友人選択において内面的な事柄を挙げる傾向は，その後，青年期や成人期を通して増加していく（Bigelow, 1977; Bigelow & LaGaipa, 1975, 1980; Hayes, Gershman, & Bolin, 1980）。

表1 幼児期・児童期と比較した青年期の友人関係の特徴（井上，1966，p.202）

	幼児期	児童期	青年期
特徴	遊びの友だち	生活の友だち	心の友
意義	社会的訓練に役立つ	社会的訓練，集団への所属性	人格の影響を及ぼしあう
選択	だれとでもなりうる	選択的になる	厳選する
契機	遊びなどの接触	接触度と好ましい行動特性	人格の尊敬と共鳴
持続性	場面的性質が強く変わりやすい	やや安定	生涯の友となるほど持続する可能性
性	男女未分化	反発・分離	異性への憧憬，恋愛への発展

ただし Weiss & Lowenthal（1975）によると，児童期からより年長になるにつれて，理想の友人の項目として，支援的であること（頼りがいがある，理解してくれる，受け入れてくれる），秘密を打ち明けることができること，信頼できること，などが挙げられるようになる一方，話が合う（communicative compatibility）ことや，関心・経験・活動を共有できることも変わらず理想の友人の項目として強調されることを指摘する。またその傾向は，高校生，新婚夫婦，中年期の親，定年間際の者，いずれにおいてもほとんど違いがないと報告している。これより，青年期において獲得される友人との内面的共有，そしてそれを核としたさまざまな経験や活動の共有は，その後の生涯でも続く，友人関係の本質的特徴とされる。

（2）関係性の特徴の発達の変化

青年期において想定される内面的なつながりをもった深い友人関係には，互いの人格を尊重し合う個と個の関わり合いが想定される。それは，互いの人格の異質性を認め合う関係性と言い換えることも可能であろう。そこに至るまでにはいくつかの質の異なる関係性の段階を経ることが知られている。ここでは，それぞれの時期にお

ける仲間関係の特質からこの点を整理する。

保坂・岡村（1986）は，学生相談におけるエンカウンター・グループの事例研究から，児童期から青年期にかけての仲間関係の発達段階として，ギャング・グループ，チャム・グループ，ピア・グループという3つの集団を想定できると述べている。

ギャング・グループは，従来の発達心理学では“ギャング・エイジ”（Hadfield, 1962）とよばれていた，児童期後半の時期において形成される集団である。ギャング・グループは多くの場合，同性，同年齢の者によって構成され，特に同一行動による一体感が重んじられる。同じ遊びをいっしょにするものが仲間であると考えられるため，遊びを共有できないものは仲間からはざされてしまう。また，排他性・閉鎖性が強く，力関係による役割分化や固有の価値が共有される。そのため，仲間集団の承認が家庭（親）の承認より重要となり，大人（親や教師）がやっではいけないというものを仲間と一緒にやる（＝ルール破り）ことにもなる。集団の特徴としては「権威に対する反抗性，他の集団に対する対抗性，異性に対する拒否性」があげられ，その結束力の強さにおいてそれまでの集団と区別される。ここで経験されるグループのメンバーとの強い結びつきが，親から自立しようとする際の子どもの不安を和らげると考えられている。

チャム・グループの“チャム（chum）”とは，特に親密な友人をさしている。アメリカの精神分析家 Sullivan（1953）が提唱した概念であり，思春期以降，中学生頃からみられる，親密で排他的な同性の仲間関係のことである。ギャング・グループにおいては遊びによる一体感が重視されていたのに対し，この段階では，興味や関心における一体感が重視され，互いの共通点・類似性をことばで確かめ合うという行為が見られるようになる。保坂（1998）は，彼ら・彼女らの会話においてはその内容よりも「私たちは同じね」という確認に意味があると指摘する。さらに，しばしばその集団内だけでしか通じない言葉を作り出し，その言葉を通じる者だけが仲間であるという境界がひかれるという。ギャング・グループの特徴が同一行動にあるとするならば，チャム・グループの特徴は同一言語にあると保坂は述べる。この言語による一体感の確認から，仲間に対する絶対的な忠誠心が生まれてくるのである。Sullivanによると，これらの行動は，チャムのメンバーに，幸福，充足感，自信を与えたいという欲求が生じたことによるとされる。この関係は「共同（collaboration）」とよべるものであり，ここにおいて真の社会化が始まるとされる。なお，この集団もギャング・グループ同様，同性の同輩集団であるが，特に女子に特徴的にみられる（黒沢・有本・森，2003）。

ピア・グループの“ピア（peer）”とは，本来「同等」という意味合いを含んだ「仲間」を意味することばであ

る。この関係においては、互いの興味や関心が似通っているという共通性・類似性だけでなく、互いに異なる部分を有することが認識され、自他の違いを認め合いながら友人関係を育むようになることが特徴となる。自立した個人として互いに尊重し合って共にいることができる状態であり、むしろ、個性の違いこそが共にいる意義となるといえる。ここでは、互いの価値観や理想・将来の生き方などを語り合うことも多く見られるようになる。高校生以上でよくみられる男女混合のグループである。

仲間関係の発達の变化を検討した研究からは、この見解を支持する方向での結果がいくつか得られている。たとえば、中学生・高校生・大学生を対象に、その友人関係の質の違いを検討した榎本（1999）においては、ピア・グループの活動に相当すると考えられる、互いの相違点を認め合い、価値観や将来の生き方などを語り合う“相互理解活動”が、男女にかかわらず、中学、高校、大学になるにつれて得点が高くなっていくことが報告されている。なお中学男子では、友人と遊ぶことを中心としたつき合い方である“共有活動”が最も多く見受けられ、高校男子においては“共有活動”および“相互理解活動”が同程度を示し、大学男子においては“相互理解活動”が最も多く見受けられるようになっていた。これより、男子においては、“共有活動”から“相互理解活動”へと友人関係が変化していくと考えられた。一方中学女子では、親密的で友人との行動や趣味の類似点に重点を置き、仲がいいことを確認するようなつき合い方をする“親密確認活動”が、高校女子では自分たちの世界を持ち、他者を入れない絆で関係を作る“閉鎖的活動”が、大学女子では“相互理解活動”がそれぞれ最も多く見受けられた。これより、女子においては、互いの関係性を確認する“親密確認活動”から“閉鎖的活動”を経て、“相互理解活動”へと移行すると考えられた。“親密確認活動”と“閉鎖的活動”はチャム・グループにおける行動として理解することが可能である。

中学・高校・大学生を対象に友だちとのつきあい方の变化を検討した落合・佐藤（1996）においても、自己開示積極的に相互理解しようとするつきあい方は、中学・高校・大学になるにつれて得点が高くなっていること、一方で、みんなと同じようにしようとするつきあい方は、中学・高校・大学になるにつれて得点が低くなることが報告されている。

2. 自己形成の観点からとらえた友人関係の意義

前節で見たように、友人関係の様相は、年齢によって変化する。だが、友人関係は生涯続くものであり、そこには年齢を問わず付与される意義や意味も指摘される（e.g., Weiss & Lowenthal, 1975）。このことについて Hartup & Stevens（1997）は、友人関係を表面的構造と

深部構造とに区別してとらえ、その深部構造については、生涯を通して安定した特徴を指摘することができるとする。表面的構造とは、具体的にどのような社会的相互作用を行うのかに関するところであり、前節でみたように、年齢と共に様々な変化の様相を示す。それに対して深部構造とは友人関係の意義や意味などに関するところであり、年齢による変化がほとんど見られない、生涯を通して安定した特徴を指摘することができるところであるとす。そして Hartup & Stevens（1997）は、友人関係に関する深部構造の特徴は、互いに安心を与え合ったり価値を認め合ったりするという、“対称的な互恵性（symmetrical reciprocity）”と表現されるとまとめている。そしてこれは、当然ながら自己形成にも寄与するところである。

では自己形成に関する友人関係の意義とは何か。それは以下の3点に整理することができるだろう。1つめは自己意識を明確にし、行動主体としての自己形成を促すという側面である。2つめは、自己理解や自己形成の指針としての側面、そして3つめは、精神的安定をもたらすという側面である。

以下、それぞれについて、もう少し詳しく見ていくこととする。

（1）異質な他者との出会いが促す自己形成

異質な他者との出会いは、自他の区別とそれに伴う自己の明確化をもたらすとされている。私たちはごく初期の頃から、他者との違いをとらえることを通して、自己の感覚を形成している。生まれた直後は自分の欲求は養育者である他者の対応によって満たされ、自他の区別が自覚されることはほとんどない状況を過ごす。だが、発達に伴い、子どもの欲求が分化したり拡大したりするにつれ、親はその欲求をすべて満たすわけにはいなくなる。また、発達に適した社会化を促そうとする養育的はたらきかけが、子どもの欲求とぶつかることもある。そのような経験が、子どもに自分とは異なる心的カテゴリーを有する他者への理解を促すとされる（浜田, 1999; 根ヶ山, 2006）。私たちは、他者との関わりの中で自分という存在を確かめ、また、他者と相互作用する存在としての自己を形成していくのである。

また、私たちは、自分がいかなる存在であるのかについても、他者や環境との関係の中で見出すということをし繰り返している。たとえば小松（2006）は、幼児と母親との対話を継続的に観察し、会話においては、自身と周囲の他者を関連づけたり比較したりすること、すなわち対比を通して自身を捉え直す行為がなされることを報告している。Miller, Mintz, Hoogstra, Fung, & Potts（1992）は、幼児が日常的に他者との関わりについての語りを繰り返すことを指摘しており、特に、他者と一緒に何かを

した（活動の共有）、他者に何かをしてもらった（行為の授受）、自己と他者の比較（社会的比較）という3つの様式が多く観察されることを見出している。そしてそれが、日常の会話における自己構成の本質的特徴であるとする。つまり、私たちは他者や環境といった自己以外のものとの関係を語りながら、自己を語る事が可能になる。これら自他の区別を認識させ、自己理解を構築するのが他者の異質性との遭遇なのである。

さらにその区別は、何らかの葛藤を引き起こす可能性を伴うことがある。この葛藤経験が、人格の社会化を促し、自己としての意識を明確にする上で大きな役割を果たすと考えられている。

たとえば友人関係におけるトラブルの一つである“いざこざ”の経験である（Hey, 1984）。それは、ごく早い時期から同世代の仲間とのかわりにおいて観察される事態であることが知られており（松永・斎藤・荻野, 1993）、ごく初期においては物や場所など物理的な事柄の所有をめぐる、成長すると、不快なはたらきかけや規則や信念など社会的な原因によって、いざこざが展開されることが観察されている（Hay, 1984; 加用, 1981; 斎藤・木下・朝生, 1986; Shantz & Shantz, 1985）。

いざこざの発生は、自己と他者との区別が明確になっていること、さらに、2者間における意見の交換が可能となっていることを必要とする。たとえば物の所有に関するいざこざは、物の所有に関する自他の区別が明確になったことの現れととらえることができる。つまり、いざこざを開始できたこと自体に、自他の区別とそこから他者への自己表現という意味がある。同時に、“物”という具体物か“信念”といった抽象物であるかにかかわらず、自己が所有するものが他者によって脅かされることによってそれを所有する自己としての感覚は強く経験され、また、それに関して抱かれている自己の要求についても理解を深めていくと考えられる。自分とは異なる他者の存在と出会い、他者とは異なる自分としてその他者に対峙することは、自己の感覚を明確にする上で最も重要な基盤となる（Laing, 1961）。いざこざをはじめとする他者とのトラブルは、そのような感覚を形成する、自他の対峙の場面であると考えられる。

さらにその解決を志向することが、行動主体としての自己の形成に大きく寄与することとなる。いざこざ場面にかかわらず、他者との関わりにおいては他者理解や共感、社会的カテゴリーや規則の理解、コミュニケーション能力といった社会的スキルの発達が必要であるが、それらもまた、仲間との交渉の中で育まれると考えられており（Garvey, 1986; 荻野, 1986; 斎藤・木下・朝生, 1986; Shantz, 1987; Verbeek & de Waal, 2001）とりわけ誤解や共感の欠如といった問題のある相互交渉の経験において、他者理解や共感の発達を促すとされる（東・

野辺地, 1992; 松永・斎藤・荻野, 1993; 斎藤・木下・朝生, 1986; 高坂, 1996）。いざこざ場面においては、社会的ルールやコミュニケーション能力などの様々な社会的能力や技能を発揮することを求められることとなり、その解決のプロセスにおいて、自己主張、自己抑制等、子どもの様々な能力の発達が観察されている（藤崎, 1999）。

もちろん、友人関係はこのような葛藤ばかりではない。4歳児を観察した松丸・吉川（2009）によると、「4歳児では、1年を通して友だちと一緒に遊ぶことがとにかく楽しくて仕方ないという子どもたちの姿がみられた」（p.138）と報告されている。仲のよい友だちと遊ぶことは、子どもたちに「楽しい」「うれしい」「心地よい」といった、快の感情をもたらすとされている。その快感は、仲良しの友だちに囲まれるということそれ自体や、遊びの質が高まり遊びが充実すること、友だちと心が通じ合う心地よさを味わうことなど、友だちと一緒に遊ぶことに伴ってもたらされる様々な肯定的な経験に基づくものである。このような経験が、友だちとの遊びに期待をもって取り組み、友だちと意欲的にかかわろうとする動機づけへ繋がると考えられる。いざこざ場面における解決への努力にも影響するだろう。

同世代の子どもたちとの間に、対等な関係を構築し、その関係を生きる過程において、関わり合いに対する価値づけや動機づけなどの能動的態度や、自己制御や適切なコミュニケーションの能力が形成されるなど、個人の人格の社会化が進むと考えられている。友人関係を通して、私たちは協同したり共同したりすることを覚え、相手に対する共感や理解や親密性、利他性など対人的側面を発達させていくのである。友人関係によって形成される行動主体としての自己の側面には、まずこのような点を指摘することができる。これは、友人関係が、類似性の高い対等な立場にある者同士の関係でありつつ、異質な他者として互いに存在し合う中で形成される関係であるからこそであるといえよう。

（2）自己形成の指針の提供

友人関係は自己理解を深めたり、自己形成意識を動機づけたりすることにも寄与する。前項でも述べたが、私たちは自己理解や自己評価のために他者と自分とを関係づけるという行為を必要とする。そしてその比較対象として、私たちは自分と類似した他者を選出する傾向があることが知られている（Festinger, 1954）。ここでの類似とは、単に能力が類似しているだけでなく、両者がおかれている状況（立場、所属する集団など）が同じであることも意味している（高田, 1981）。その点、対等な友人関係は、この比較過程の対象となる類似性を備えており、自己理解や自己評価における比較基準としての役割

を相互に果たしていると考えられる。私たちは日常において自分と身近な友人とを常に比較しているのである。

そして自己向上動機が高まっている際には、自分より優れた他者と自分とを比較する上方比較がさかんになることが知られている (Wheeler, 1966)。そのとき、身近な友人に自分よりも優れたところを見出すことは、「あのようにになりたい」という目標意識や「自分も頑張ろう」という意欲を駆り立てることになるだろう。これは“ライバル意識”とよばれるところであり、小学校中学年くらいから、友人には“ライバル”としての意義も付加される。友人関係の本質は“対称的な互恵性”であり、ライバル意識はそこからみ出すという印象を抱かせる。だが室山 (1995) によると、ライバル関係としては「課題中心関係」「敵対関係」に加え「友人関係」「親友関係」も存在することが示されている。相手に対する競争意識は友好的対人感情の形成を阻害することが指摘されるものの、競争後の関係性に配慮すれば、必ずしも競争によって相手に対する否定的感情が形成されるわけではないとされる (室山・堀野, 1991)。

ライバル意識には「相手の頑張っている姿が自分を奮起させる」といった動機づきの側面があること (太田, 2001) が指摘されている。そして、丹野・松井 (2006) においては、「負けたくない」「切磋琢磨し合える」といった“ライバル性”の意識も、友人関係の機能として抽出されている。つまり、ライバル性の意識には競争意識という側面も存在するが、そこには友人の優れた点を認めるという意識が大前提にある。さらに相手の優れた点に対して単に憧れたりうらやんだりするのではなく、それと自分とを比較し、自己理解や自己の能力を発達させようと動機づけていくものである。これは、明確な自己形成意識 (中間, 2007) の現れととらえることができる。

また、Blos (1974) は、個人の自我理想形成過程に友人の存在が大きく関わることを指摘した。自我理想とは、自分自身にとっての価値の体系である。それは自らの行動を価値づけたり方向付けたりするものであり、自己形成の指針としての役割を果たすと考えられる。Blos によると、青年期の初期には“自己愛型対象選択”とよばれる独特の友人選択の様式が観察される。それは、相手を自分自身の延長のように感じ、相手のことを「自分が所有したいと願う資質をもつ人」「自分がなりたいと望む相手」としてお互い理想化し合う傾向である。この中で、相手をモデルとしながら、自分自身の価値観や理想が形づくられていくという過程が指摘されている。これは先に示した融合的な自他関係を基盤とした理想化された友人関係である。だがその過程を経て、次第に自分なりの十分納得して受け入れられる行動や価値観の基準が明確になるにつれ、現実の相手に向き合えるようになる、すなわち、相手と自分の違いも受け入れられるようになっていくと Blos は述べる。

ていくと Blos は述べる。

男子学生を対象とした岡田 (1987) においてはこの見解を支持する傾向が見られている。そこでは、中学生、高校生、大学生を対象に、パーソナリティ特性について、現実自己、理想自己、親友という観点からそれぞれ評定をしてもらい、3つの評定間の関連が検討された。その結果、中学生においてのみ、理想自己についての評定と親友についての評定に有意な正の関連が見受けられた。高校、大学になると、現実自己についての評定と理想自己についての評定との間の関連が有意となり、それらと親友についての評定とは関連が有意でなかった。これは、Blos の見解を支持する結果といえる。

児童期までに、子どもは養育者をはじめとした大人に同一化することによって様々な価値観を形成していく。そしてそれら大人に同一化して形成してきた価値観は、一般に、青年期において、問い直しがなされるとされる (Erikson, 1950/1963)。乳幼児期、児童期における同一化の過程が、同一化の対象への信頼や愛着によって支えられていることをふまえると (浜田, 1999)、新たな価値形成のための同一化の対象選択において、親密な関係にある友人が求められても不思議ではない。それが、青年期の自己形成を促進すると考えられる。

(3) 精神的安定との関連

青年期の親密な関係には、精神的健康や学校適応、安心感を高める側面があるとされるが (長尾, 1997; 須藤, 2003; 田中・吉井, 2005)、それは、相互に承認し合う関係として理解されている。

青年期は一般的に自己評価が低下する時期である (都筑, 2005)。自己をとらえる視点の構造自体が大きく変わるなどが関連すると考えられるが (Harter, 2006)、その変容の過程においては、他者からの支えによって自己価値の感覚を確認することで精神的安定を得ているとされる (Fullerton & Ursano, 1994)。また、自分がどのような存在であるかを見極め、どのように生きていくかを考えるアイデンティティ探求の時期でもある (Erikson, 1950/1963)。それは交換不可能な個々の自己の課題であるが、その探求過程における不安を共有し合ったり励まし合ったりすることは可能である。さらにその過程を互いに自己開示し合うことが、対話による自己の生成や、言語化による自己理解を促すなど、互いのアイデンティティ形成に寄与するとも考えられる。

ただし、ここでの相互承認の過程に自他の区別が明確にあるかどうかは疑わしい。つまり、そこにある親密な関係は、Erikson (1959) の述べるような真の親密な関係とは質的に異なるのではないかということである。Erikson によると、親密性の形成においてまず重要なのは「相互性」(mutuality) であり、互いの欲求を認め合

い、相互に欲求を満足させられるような関係性を築けるということである。それは、自分が自分らしくあるだけ、相手もまたその人らしくあることができる関係性のことであり、他者と真に親密な関係を結ぶことは、確固たる自己確立の結果であると同時に、自己確立の試練であるとされる。

青年期がアイデンティティの発達途上にあることを考えると、青年期において結ばれる親密な友人関係は、互いの人格を尊重し合う関係というよりも、互いが自身のアイデンティティの感覚や不安定な自己感を担保するための関係、自己の延長上にある自己愛的な関係 (Blos, 1967, 1974)、あるいは、自己中心的な世界に相手を位置づけた上で成立した関係 (Elkind, 1967) として理解した方がよさそうである。ごく単純に言ってしまうと、関係性自体が自己である (中間, 印刷中) が故の、自他融合的な親密な関係ということである。

青年期に限らず、友人関係は、通常、類似性を端緒として形成されることが多い。特に、互いの好意の要因としては、性質や好み、興味や関心といった態度の類似性が指摘されることが知られているが (Byrne, 1971)、そもそも友人関係には、互いの状況や立場、所属する集団などにおける客観的な類似性が多く存在する。この、同じ状況にあるということが、青年期においては特に重要な意味をもつと考えられる。互いの悩みをわかり合ったり、協同し合ったり、対等の立場において支え合ったりすることを必要とする時期においては、他者を自己とは異なる存在と明確に区別しない、自己中心的な推論や拡張的な自己意識に基づく他者との相互作用であっても、それが双方にとって、相互に意味のある自己承認の過程として成立する可能性があるということである。そこには同じ状況を生きる者としての同質性への注目があり、自他の相互性というよりも自他の融合性を基調とした同胞意識の共有として理解される。

相互のアイデンティティ発達の様相にも大きく依存するのだが、つまるところ、青年期のある時期における友人関係と青年の精神的安定との関係の本質は、自己を問い直し、アイデンティティを模索する不安定な状況を支え合う自他融合的な“同胞意識”にあると考えられるのである。

3. 青年期の親密な関係をめぐる両価性の問題

青年期における親密な関係には、前項で述べたように精神的安定をもたらすという側面が指摘される。だがその親密な関係が、時として青年に息苦しさをもたらすこともある。最終節にあたる本節では、青年期における親密な関係と自己形成との関係をさらに掘り下げて検討するため、その関係に伴う両価性に焦点をあて、今後の検討の観点を提出する。

(1) 親密な関係の発達の意義

友人関係の最も発達した形態と考えられるピア・グループとそれ以前との関係性の大きな違いは、互いの異質性を認め合う点にある。それに対してギャング・グループには互いの行動の同質性を、チャム・グループには互いの内面の同質性を求め合う関係という特徴が指摘される。この点で、チャム・グループは、親密な関係とはいえず、相互性に基づいた真の親密な関係とはいえない。

だがその関係がすなわち自己形成や人格形成にとって否定的な関係とは限らない。長尾 (1997) は、チャム・グループを形成する時期である中学生においては、同調的な友人関係は、必ずしも否定的な意味を持つとはいえないのではないかと考え、中学生女子と高校生女子を対象に、友人関係スタイルと適応との関連を検討した。

その結果、中学生においては、ピア・グループの特徴をもつ群とチャム・グループの特徴をもつ群における学校生活享受感や自己肯定意識の差はほとんどみられず、共に適応的な状態を示していた。それに対して高校生においては、ピア・グループの特徴をもつ群がチャム・グループの特徴をもつ群よりも自己受容、自己実現的態度、自己表明・対人的積極性において有意に高く、被評価意識・対人緊張において有意に低いという結果が得られ、両者の差がより顕著になっていた。これより、高校生においてなお密着した友人関係スタイルを持っている場合には、発達段階に応じた友人関係スタイルが形成できず心理的適応も阻害されることが考えられるが、中学生においてはそのような友人関係スタイルは不適応的とはいえず、発達に即した友人関係として理解できると考えられた。

しかしながら、この結果はチャム・グループのもつ積極的意味を見出すには至っていない。また、同じく長尾 (1999) の研究からは、青年期の自我発達上の危機との関連においても、チャム・グループを有することの肯定的意味は明確には得られていない。にもかかわらず、青年期初期には、特に女子においては、チャム・グループのような親密な関係が築かれることが多い。そこにはどのような意味があるのだろうか。精神的安定との関係はすでに述べたところであるので、ここでは発達の意義について考えたい。

青年期初期に観察されるチャム・グループの本義は、情緒的で親密な関係である。そして、ピア・グループが一足飛びに形成されるわけではないことをふまえると、チャム・グループのような自他融合的な親密な関係には、個と個が互いに認め合う関係の前段階における関係としての発達の意義をもつ可能性を探究できるように思われる。すなわち、その関係を生きることが、相互に違いを認め合う友人関係への変化を促すような、そのような意義である。青年期の親密な関係を発達の過程の中に位置

づけてみると、次のような点がその発達の意義として浮かび上がってくる。

第1は、異質性を認め合う関係を有する前の発達のレディネスを整える段階としての意義である。互いの異質性を認め合う関係には、互いが異質な他者として存在することが必要となる。価値観や自分なりの考えが不明瞭な段階では、相互に対峙し合う他者となることは難しく、相手に同調したり、他者に同一化したりしながら、自分にとってよりどころとできる価値観を模索し、明確にしていくことを試みる時期が必要となる。Blosが述べるように、その時期を経て、自己の価値観や信念が明確になっていくと、互いに対峙した異質な他者として存在しあうことが可能になる。その途上にあっては、友人はむしろ自己の延長であり、友人を見ながら自己を見erという時期が過ぎることが予想される。

つまり、チャム・グループのような親密な関係は、互いの異質性を認め合う関係を成立させるだけの自己がまだ確立していない状況において生じる必然的な関係としてとらえることができる。そして次の関係へと移行する上で必要な、他者にとって異質な他者としての自己が、その関係の中で形成されていくと考えられるのである。

第2は、逆説的ではあるが、その同質的な親密な関係の故に、自他の区別が明確になり、互いにとっての他者性の獲得、すなわち、他者とは異なる内面を有した自己としての意識が明確になる可能性である。

たとえ最初と同じであったとしても、その同質性は不変ではない。自分の理想や価値観が明確になること、あるいは異性との関係をもつことや進路に対する意識が高まることなど、青年期にはさまざまな自己の変化が経験される。自己が変化することによって、友人関係もまた変化せざるをえない。友人関係と自己とは相互構成的な関係にあり、友人関係は個人の自己形成に大きく影響するものであると共に、それ自体が個々の発達に応じて構成されていくというものであるからである。よって、自他融合的な同胞意識は、自己の発達に応じて適切に破綻することとなる。

その変化にもかかわらず、友人関係が変わらず互いに同調的な結びつきを要求してくるような場合には、その関係に対する居心地の悪さが経験され、かえって「そうではない」自分の存在を際立たせるのではないかと思われる。変化しつつある自己、友人と同じではなく、また、以前の自分とも異なる自己についての意識は、以前と同様のものとして扱われることによって、その独自性が強く意識されることになるのではないだろうか。

幼稚園における子どもの遊びを観察した岩田(2011)は、子どもの仲間づくりのプロセスにおける行為の観察から、最初は些細な同じ行為や同じモノによる結びつきによって、同じモノをもたない、あるいは同じ行為をし

ない者を排除する関係が観察されること、しかし、子どもの友人との関わりは、発達にともないその関係を壊すような事態へと展開されることを報告している。比較的一緒に遊ぶことが多いメンバーの中で排除するような強い言葉や「悪口」が多く聞かれるいざござ状況が噴出するようになるのである。これは、幼稚園という状況にも馴染み、また発達の興味や興味の広がりとともに遊びのあり方も広がっていったことで、同じ行為などの小さな共通点のみで集団を維持することは難しくなっていったためと考察されている。

ここからは、同調的な関係を真摯に積み重ねていくと、自ずと、その関係の限界に直面することになるのではないかと予想される。つまり、異質性を認め合う関係は、それ以前の同質性を求め合う関係への埋没によって促される可能性が指摘されるのである。

第3は、親密な関係は、文字通り、異質性を認め合う関係の前段階、そこへと移行するための関係性の基盤づくりの段階として機能している可能性である。3歳児から5歳児を観察した田窪・掘越(2012)によると、幼稚園に入園したての子どもは、まずは保育者という安心できる大人への関心が強く、その後、園生活になれてくると、仲間の姿にも目を向け始め、仲間への関心を強めていくようになる様子が報告されている。このアナロジーをもちいると、青年期の友人関係についても、まずは、安心できる同質性に注目した関係が深められ、そこを基盤としながら、互いの異質性にも関心をもつことができるようになるという過程が想定可能である。

深いレベルでの相互の自己開示は、情緒的で親密な関係において可能になるとされる(丹羽・丸野, 2010)。相互の自己開示が促進されれば、友人との理想や価値観の相違に直面したり、悩みを共有しながらもその悩みの内容や悩み方の違いに気づいたり、次第に互いの相違に気づく機会も増えていくと考えられる。そのような相互の自己開示活動は、直接的に互いの異質性に遭遇する機会をもたらし、またそれを相互に尊重しあう態度を形成していくと考えられる。同調的な親密な関係の経験が、そのような自己開示活動を安心して行う基盤を提供しているならば、その発達の意義はより明確になるとと思われる。

(2) 親密な関係がもたらすリスク

一方で、青年期の親密な関係が青年にとって息苦しさや不安をもたらす側面があることも指摘されている。

土井(2008)は、際限なく友情を確認し合う関係を、つながることそれ自体に対する「嗜癖」であると表現する。そして、「嗜癖の対象は、それを得ることから生まれる快樂よりも、それを失うことに対する不安のほうが強くなりがちである」(p.147)と述べている。また、福

富（1997）によると、男女高校生900人において、「仲間はずれにされるのは絶対いやだ」という項目に対しては64%の者が、「何をするにも、皆とっしょだと安心する」「できるだけ仲間と同じように行動したい」「流行遅れになるのはいやだ」などの項目に3～4割の者があてはまると答えていた。このことについて福富は、「仲間はずれにならないようにと心がけながら、とにかく仲間とっしょに行動し、仲間うちの流行に遅れたりはずれたりしないようにするといった、仲間に対する強い同調性が如実に示されている」と述べている。また昨今の携帯電話を介したエンドレスなコミュニケーションにおいて、自分の送信したメールに相手からの返信がないと相手とのつながりか感じられなくなり、不安や不信、孤独感に陥ってしまうなど、コミュニケーションレベルでの同質性に対する過敏さが指摘されている（上別府・杉浦, 2002; 辻, 2006）。

これらは、友人関係をより親密なものにしていくというよりも、友人関係の崩壊に対する高い不安を抱え、その関係の維持に専心せざるをえないような実態を指摘するものである。そのような関係性への専心は、自他境界をますます曖昧なものにする共依存的な関係となり、次第に自己を喪失するような感覚へと至らしめる場合がある。青年がその種の問題に陥る可能性は異性との恋愛関係について指摘されてきたところであるが（大野, 1995）、不安定な自分の存在をその関係につなぎとめることでかろうじて保つというような関係は、友人関係においても成立すると考えられる。大野によると、そのような関係は、相手からの賞賛や賛美を常に求め、相手からの評価に意識を奪われてしまうものである。その関係に身を置くことは次第に相手に呑み込まれるような不安を喚起するのだが、相手が自分以外に興味をもつことへの不安も高く、その関係への固着は強い。関係を続けることにも関係が終わることにも不安が抱かれる葛藤状態に置かれるのである。恋愛関係の場合、その関係が終結することでそこから脱却できると考えられるが、友人関係の場合はその解決がより難しくなるだろう。これは青年期の親密な関係が自己形成過程にもたらすリスクといえる。

なぜ、親密な関係はそのようなリスクをもたらすことがあるのだろうか。それは、これまで述べてきたように、その関係が自他融合的な同胞意識を基盤とする故と理解されるのであるが、それに加えて、その親密な関係が以下のような特質を有しているためと推測される。

1つは、「排他性」である。親密な関係は、排他性と裏腹に構築される場合が少なくない。幼稚園児を対象とした研究ではあるが、たとえば山本（2000）は、集団的行動として同じ行動をとるようになったメンバーがその行動から誰かを排除することによって、集団の内と外とが明確になり、集団への帰属意識が高まることを報告し

ている。排他性とはこのように、集団や関係において、その集団や関係以外の者を受け入れないことを意味し、対人的なトラブルとの関係がこれまで指摘されている（e.g., 石田・小島, 2009）。

排他性は、集団における関係性の深まりと共に見られるものであり、所属メンバーの関係内部への関心・関与の高さによって維持される。そのため、その関係に属するメンバーに益するものと考えられる。だが一方で、その集団自体によってもたらされているところもあり、それは、集団内のメンバーにとってその集団に属することへのストレスを経験させることとなる。集団のもつ排他性は、集団外の者に対しては壁を作り出し、集団内に対しては斉一性の圧力を高めるものとして機能する。集団内のメンバーは同調に対しては受容という報酬を、逸脱者に対しては無視という形の制裁を受けることが明らかになっている（Schachter, 1951）。そのため、その集団に属することは、集団外の者と交流する自由意思を束縛され、また、集団のメンバーとしての同調圧力を被ることにもつながるのである。これが、親密な関係に伴う息苦しさを生むと考えられる。Dunn（2004）は、排他的な徒党が形成されると、そこには友情、愛情、理解、からかい、残虐さが緊密に編みこまれることを指摘する。いじめの背後に、集団内での同調行動からの逸脱者に対する否定的な態度や、大勢の他者に対する同調傾性が潜んでいるという考察もみられる（竹村・高木, 1988）。

ここでは、第2節で述べたような友人とのトラブルにおける自己形成上の意義を指摘することが難しい。年齢が上がるにつれて、友人関係におけるトラブルは、必ずしもわかりやすい攻撃や自己主張に伴うものばかりとは限らなくなり、無視、仲間はずれ、悪意のある噂などを含む攻撃行動が増加することが知られている。Crickら（Crick & Grotpeter, 1995; Crick, Ostrov, & Werner, 2006）はそのような「意図的な操作や仲間関係にダメージを与えることによって、他者を傷つける行動」を“関係性攻撃（relational aggression）”と名付けて身体への暴力や直接的な暴言による顕在的攻撃（overt aggression）と区別している。

関係性攻撃を受けることは、看過できない傷つき体験となることがある。小田部（2008）は、親しい他者からの意図的あるいは無意図的な言語的攻撃や間接的攻撃を受けるような体験を「日常型心の傷」とし、それを、「心の傷」を上位概念とする下位概念の中に位置づけることを提案している。小田部・加藤・丸野（2009）は「トラウマ」と「日常型心の傷」とは大きな差異性を持ちながらも同じメカニズムで説明可能な類似性を持っているという見解を打ち出している。傷つき体験が蓄積され、他者や世界に対する展望や自己観、ひいては将来展望が否定的になってしまう場合には、自己形成における

意義を見出すことは難しい。

この視点からギャング・グループやチャム・グループの特徴をとらえると、外面的な同一行動レベルでの一体感が重視される仲間集団であるギャング・グループにおいては遊びが共有できない者が、互いの類似性を言葉で確かめ合うという内面的な類似性レベルでの一体感が重視される仲間集団であるチャム・グループにおいては仲間間で通用する言葉が通じない者が、それぞれ疎外されることが考えられる（保坂, 1998; 黒沢・有本・森, 2003）。排他性が高い集団では共有の行動がとられやすく、加えて仲間以外の他者と関わる機会が少なくなるため、その関係から排除されることは、行動面・心理面両面において孤立してしまうことにつながりやすい。その不安が、関係性に対する息苦しさを感ぜながらもなおその関係に専心せざるを得ないという葛藤を生じさせると考えられるのである。

なお、中学生においては女子の方が男子よりも排他性欲求が高いことが報告されている（三島, 2004, 2008）。このことが、中学生女子における友人関係を難しくさせている可能性が示唆される。

親密な関係に指摘されるもう1つの特質は、その関係の基盤の質である。山岸（1998）は、「信頼」に関する概念整理を行う中で、他者に対する信頼の形成には2つのパターンがあることを指摘する。1つは人格的信頼であり、もう1つは人間関係の信頼である。人格的信頼とは、相手の一般的な人間性に基づいてその人を信頼するというものである。その人について直接的・間接的に得た情報をもとに、相手がどのような人であるかを自分なりに見極め、その結果としてその人を信頼するというものである。人間関係の信頼とは、その人がどのような人であるかにかかわらず、その人が自分に対して抱いている好意的な態度や愛情などが分かっているために、その人を信頼するというものである。この区別は、友人関係の質的区別を考える上でも有用である。上記で指摘したような関係性は後者、すなわち、人間関係の信頼を志向する関係と考えられるのである。その実現のためには、相手に好意を発信し続けねばならないし、相手からの好意を確認し続けねばならない。その志向性のもとでは、好意の発信を中断することや、相手からの好意を受け取れないということが、すなわち関係の危機に直結しかねない事態となりうると考えられる。

このような場合、その関係を維持したいと思う限り、それを可能にする行動へと強迫的に駆り立てられてしまう。そこにある親密な関係の根柢を、1つ1つの行動という不安定性の高いものではなく行動の発信主体である相互の人格という安定的なものへととらえ直す視点の移動が必要になると考えられる。

4. おわりに

本研究では青年期の自己形成過程について、友人関係の側面から検討した。自己形成過程に対する友人関係の寄与について述べるとともに、青年期の親密な関係に焦点をあて、その意義と問題点を指摘した。ここで提出された観点についてはまだ具体的な検討が十分になされていない。友人関係の質的变化と自己の様相の変化との関連についての追跡的な調査が今後必要となると思われる。同時に、ここで指摘した発達の意義をふまえながら、自己形成過程を構造的に整理する理論的検討もさらに必要である。

また、本研究でとりあげた親密な関係は、昨今、その質的変容に関する議論がさかんになされているところである。行動面での親密さと心理面での親密さが対応しない友人関係（上野・上瀬・松井・福富, 1994）や表面的で快活な関係、内面的関係を避ける傾向、相手に気を使う関係などを現代青年の友人関係として指摘する見解（岡田, 1995）などは、親密な関係が同調的な行動的側面だけのものになっていることを指摘するものである。一方で、主観的には、むしろ一層親密な関係が構築されていると感じられており、友人関係への満足度もむしろ高まっているという指摘もある（橋元, 2005; 武内, 2004）。その流れにおいては、上記親密な関係の弊害を克服するような新たな自己の形態が形成されていることも提出されている（フリッパー志向：辻, 1999）。コミュニケーション・ツールの開発に伴い、1つの関係性自体に多様な質が多層的に共存しているという指摘もある（Davis, 2010）。それらをふまえた上で、本稿での議論をさらに検討していく必要がある。

なお、青年期の自己形成過程に影響を及ぼす関係性は友人関係にとどまらないことは言うまでもない。また、それぞれの関係が独自に存在しているわけではなく、個人はさまざまな関係性の中を生きている。自己形成過程と関係性との関連を総合的に検討していく際には、それら関係性相互の関連や各関係性の重要性についても考慮していく必要がある。青年期の自己形成に関するさらなる検討のために、このことも付記しておく。

引用文献

- 東 敦子・野辺地正之（1992）幼児の社会的問題解決能力に関する発達の研究 教育心理学研究, 40, 1, 64-72.
- Bigelow, B. J. (1977) Children's friendship expectations: A cognitive developmental study. *Child Development*, 48, 246-253.
- Bigelow, B. J. & La Gaipa, J. J. (1975) Children's written descriptions of friendship: A multidimensional analysis. *Developmental Psychology*, 11, 857-858.
- Bigelow, B. J. & La Gaipa, J. J. (1980) The development

- of friendship values and choice. In H. C. Foot, A. J. Chapman, and J. R. Smith, (Eds.), *Friendship and social relations in children*. New York, NY: Wiley.
- Blos, P. (1962) *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York, NY: Free Press. (野沢栄司 (訳) (1971) 青年期の精神医学 誠信書房)
- Blos, P. (1967) The second individuation process in adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 162-186.
- Blos, P. (1974) The geneology of ego ideal. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 29, 43-88.
- Byrne, D. (1971) *The attraction paradigm*. New York, NY: Academic Press.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995) Relational aggression, gender, and social psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- Crick, N. R., Ostrov, J. M., & Werner, N. E. (2006) A longitudinal study of relational aggression, and children's social-psychological adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 34, 131-142.
- Davis, K. (2010) Coming of age online: the developmental underpinnings of girls' blogs. *Journal of Adolescent Research*, 25, 145-171.
- 土井隆義 (2008) 友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル— ちくま新書
- Dunn, J. (2004) *Children's friendships: The beginning of intimacy*. Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- Elkind, D. (1967) Egocentrism in adolescence. *Child Development*, 38, 1025-1034.
- 榎本淳子 (1999) 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- Erikson, E. H. (1950/1963) *Childhood and society*, 2nd ed. New York, NY: Norton. (仁科弥生訳 (1977) 幼児期と社会 I みすず書房)
- Erikson, E. H. (1959) *Psychological issues: Identity and the life cycle*. New York, NY: Norton. (小此木啓吾 (訳編) (1973) 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房)
- Festinger, L. (1954) A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- 藤崎春代 (1999) 社会的認知の発達 内田伸子・臼井博・藤崎春代 (編) 乳幼児の心理学 有斐閣, pp.109-127
- 福富 護 (1997) 思春期が人生の中でもつ意味 児童心理, 2月号臨時増刊, 3-12.
- Fullerton, C. S. & Ursano, R. J. (1994) Preadolescent peer friendship: A critical contribution to adult social relatedness? *Journal of Youth and Adolescence*, 23, 43-63.
- Garvey, C. (1986) Peer relations and the growth of communication, In E. C. Mueller, & C. R. Cooper, (Eds.), *Process and outcome in peer relationships*. Orlando, FL: Academic Press, pp.329-345.
- Goodnow, J. J., & Burns, A. (1985) *Home and school: A child's eye view*. Sydney, AU: Allen & Unwin.
- Gurucharri, C. & Selman, R. L. (1982) The development of interpersonal understanding during childhood, preadolescence, and adolescence: A longitudinal follow-up study. *Child Development*, 53, 924-927.
- Hadfield, J. A. (1962) *Childhood and adolescence*. London, UK: Penguin Book.
- 浜田寿美男 (1999) 「私」とは何か—ことばと身体の出会い— 講談社選書メチエ
- Harter, S. (2006) The self. In N. Eisenberg, (Ed.) *Handbook of child psychology, vol.3: Social, emotional, and personality development*. Hoboken, NJ: Wiley, pp.505-570.
- Hartup, W. W. & Stevens, N. (1997) Friendships and adaptation in the life course. *Psychological Bulletin*, 121, 355-370.
- 橋元良明 (2005) パーソナル・メディアの普及とコミュニケーション行動—青少年にみる影響を中心に— 竹内郁郎・児島和人・橋元良明 (編著) 新版・メディアコミュニケーション論 北樹出版, pp.326-345.
- Hay, D. F. (1984) Social conflict in early childhood. In G. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development, 1*, Greenwich, CT: JAI, pp.1-44.
- Hayes, D. S., Gershman, E., & Bolin, S. J. (1980) Friends and enemies: Cognitive bases for preschool children's unilateral and reciprocal relationships. *Child Development*, 51, 1276-1279.
- 保坂 亨 (1998) 児童期・思春期の発達 下山晴彦 (編) 教育心理学Ⅱ：発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会, pp.103-123.
- 保坂 亨・岡村達也 (1986) キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討：ある事例を通して 心理臨床学研究, 4, 15-26.
- 井上健治 (1966) 青年と人間関係——(1)友人関係 沢田慶輔 (編) 青年心理学 東京大学出版会, pp.195-208.
- 石田靖彦・小島 文 (2009) 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連—仲間集団の形成・所属動機という観点から— 愛知教育大学研究報告, 58 (教育科学編), 107-113.
- 岩田恵子 (2011) 幼稚園における仲間づくり—「安心」関係から「信頼」関係を築く道筋の探求— 保育学研

- 究, 49, 157-167.
- 上別府圭子・杉浦仁美 (2002) 携帯 e メールが思春期の対人関係に及ぼす影響—首都圏5公立中学校における実態把握— 安田生命社会事業団研究助成論文集, 38, 48-57.
- 加用文男 (1981) 「幼児のケンカの心理学的分析」『現代と保育』9. ささら書房, pp.176-189.
- 小松孝至 (2006) 母子の会話の中で構成される幼児の自己: 「自己と他者の関連づけ」に着目した1事例の縦断的検討 発達心理学研究, 17, 115-125.
- 黒沢幸子・有本和晃・森 俊夫 (2003) 仲間関係発達尺度の開発—ギャング, チャム, ピアグループの概念にそって— 目白大学人間社会学部紀要, 3, 21-33.
- Laing, R. D. (1961) *Self and others*. London, UK: Tavistock. (志貴春彦・笠原嘉 (訳) (1975) 自己と他者 みすず書房)
- 松丸英里佳・吉川はる奈 (2009) 4歳児の園生活での仲間関係の発達に関する研究 埼玉大学紀要 (教育学部), 58, 135-143.
- 松永あけみ・斎藤こずゑ・荻野美佐子 (1993) 保育園の0~1歳児クラスの子ども同士のいざこざにおける社会的能力の発達 山形大学紀要, 10, 505-508.
- Miller, P., Mintz, J., Hoogstra, L., Fung, H., & Potts, R. (1992) The narrated self: Young children's construction of self in relation to others in conversational stories of personal experience. *Merrill-Palmer Quarterly*, 38, 45-67.
- 三島浩路 (2004) 小学校高学年のインフォーマル集団の排他性に関する研究生徒指導研究, 15, 51-56.
- 三島浩路 (2008) 仲間集団指向性尺度の作成—小学校高学年用— カウンセリング研究, 41, 129-135.
- 室山晴美 (1995) ライバルとして記述される対人関係に関する一考察 心理学研究, 65, 454-462.
- 室山晴美・堀野緑 (1991) 競争場面における敗北者の課題認知と対人認知: 負け方と勝者からのフィードバックの効果 教育心理学研究, 39, 298-307.
- 中間玲子 (2007) 自己形成の心理学 風間書房
- 中間玲子 (2012) 人格心理学における自己論の流れ 梶田叡一・溝上慎一 (編) 自己の心理学を学ぶ人のために 世界思想社, pp.44-62.
- 中間玲子 (印刷中) 自尊感情と心理的健康との関連再考—「恩恵享受的自己感」の概念提起— 教育心理学研究, 61.
- 長尾 博 (1997) 前思春期女子の chum 形成が自我発達に及ぼす影響—展望法と回顧法を用いて— 教育心理学研究, 45, 203-212.
- 長尾 博 (1999) 青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因 教育心理学研究, 47, 141-149.
- 根ヶ山光一 (2006) <子別れ>としての子育て NHK ブックス
- 丹羽 空・丸野俊一 (2010) 自己開示の深さを測定する尺度の開発 パーソナリティ研究, 3, 196-209.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 荻野美佐子 (1986) 低年齢児集団保育における子ども間関係の形成 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ (編) 子ども時代を豊かに 学文社, pp.18-58.
- 岡田 努 (1987) 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116-121.
- 岡田 努 (1995) 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 大野 久 (1995) 青年期の自己意識と生き方 落合良行・楠見孝 (編) 自己への問い直し—青年期— 金子書房, pp.89-123.
- 太田伸幸 (2001) 学習におけるライバルを認知する理由の検討 性格心理学研究, 10, 45-57.
- 小田部貴子 (2008) 対人関係の中での「日常型心の傷」—歪められていく自己像/他者像— 教育と医学
- 小田部貴子・加藤和生・丸野俊一 (2009) 「心の傷」に関する諸研究をどのように位置づけるか—「日常型心の傷」を取り入れた新たな枠組みの提案— 九州大学心理学研究, 10, 61-80.
- Rubin, K. H., Bukowski, W. M., & Parker, J. G. (2006) Peer interactions, relationships, and groups. In N. Eisenberg, W. Damon, & R. M. Lerner (Eds.), *Handbook of child psychology, 6th ed.: Social, emotional, and personality development*, Vol. 3. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, pp.571-645.
- 斎藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ (1986) 仲間関係 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ (編) 子ども時代を豊かに 学文社, pp.59-111.
- Schachter, S. (1951) Deviation, rejection and communication. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 46, 190-207.
- Shantz, C. U. (1987) Conflict between children. *Child Development*, 58, 283-305.
- Shantz, C. U., & Shantz, D. W. (1985), Conflict between children: Social-cognitive and sociometric correlates. In M. W. Berkowitz (Ed.), *Peer conflict and psychological growth: New directions for child development*. San Francisco, CA: Jossey-Bass, pp.3-21.
- 須藤春佳 (2003) 前青年期の「chumship」体験に関する研究: 自己感覚との関連を中心に 心理臨床学研究, 20, 546-556.
- Sullivan, H. S. (1953) *Conceptions of modern psychiatry*. New York, NY: Norton. (中井久夫・山口隆 (訳))

- (1976) 現代精神医学の概念 みすず書房
- 高坂 聡 (1996) 幼稚園児のいざごごに関する自然観察的研究 発達心理学研究, 7, 62-72.
- 高田利武 (1981) 社会的比較過程理論における類似性仮説—その批判的検討(1)— 群馬大学教育学部紀要(人文・社会科学編), 31, 275-290.
- 竹村和久・高木 修 (1988) “いじめ”現象に関わる心理的要因—逸脱者に対する否定的態度と多数派に対する同調傾性— 教育心理学研究, 36, 57-62.
- 武内 清 (2004) 第1章 調査対象の特質と高校生活 深谷昌志(監) 高校生は変わったのか(2)—1980年・1992年調査と比較して— モノグラフ・高校生 VOL.70 ベネッセ未来教育センター, pp.8-13. <http://www.crn.or.jp/LIBRARY/KOU/VOL700/GIF/S8700008.PDF>
- 田窪みゆり・掘越紀香 (2012) 幼稚園児におけるひとり行動の変容と意味—3歳児と5歳児との比較— 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 34, 223-236.
- 田中良仁・吉井健治 (2005) チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響 心理臨床学研究, 23, 98-107.
- 辻 大介 (1999) 若者のコミュニケーション変容と新しいメディア 橋元良明・船津衛(編) 子供・青少年とコミュニケーション 北樹出版, pp.11-27.
- 辻 大介 (2006) つながりの不安と携帯メール 関西大学社会学部紀要, 37, 43-52.
- 丹野宏昭・松井 豊 (2006) 大学生における友人関係機能の探索的検討 筑波大学心理学研究, 32, 21-30.
- 都筑 学 (2005) 小学校から中学校にかけての子ども「自己」の形成 心理科学, 25, 1-10.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 (1994) 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- Verbeek, P., & de Waal, F. B. M. (2001) Peacemaking among preschool children. *Journal of Peace Psychology*, 7, 5-28.
- Weiss, L., & Lowenthal, M. E. (1975) Life-course perspectives on friendship. In M. E. Lowenthal, M. Thurnher, & D. Chiriboga (Eds.), *Four stages of life: A comparative study of women and men facing transitions*. San Francisco, CA: Jossey-Bass, pp.48-61.
- Wheeler, L. (1966) Motivation as a determinant of upward comparison. *Journal of Experimental Psychology. Supplement*, 1, 27-31.
- 山岸俊男 (1998) 信頼の構造—こころと社会の進化ゲーム— 東京大学出版会
- 山本登志哉 (2000) 2歳と3歳 群れ始める子どもたち: 自律的集団と三極構造 岡本夏木・麻生武(編) 年齢の心理学: 0歳から6歳まで) ミネルヴァ書房, pp.103-141.
- Youniss, J. (1980) *Parents and peers in social development*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Youniss, J. & Smollar, J. (1985) *Adolescent relationships with mothers, fathers, and friends*. Chicago, IL: University of Chicago Press.